０５／０１／３０　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：隣人を愛するとは
聖書箇所：ヤコブの手紙　２章１－１３節

ヤコブはこれまでに、本当のクリスチャンというのは、試練に遭遇したときにそれは苦しく辛いけれど、その中にあって主に期待を置きそれを喜ぶ者であると、そのように私たちに教えてくれました。また、ヤコブはもうすでに１章で私たちに本当のクリスチャンというのは、みことばを実践する者たちであるということを言いました。そして、この２章になるとヤコブは同じように、本当の信仰者というのは実はこういう人であるということを教えて行くのです。私たちが本当に救われているのかどうか、私たちの信仰が本物かどうかというのは、このみことばを見ることによって明らかになります。試練に対する私たちの態度がどうであるか、みことばに対する私たちの態度がどうであるかを教えたヤコブは、これから私たちの隣人との関わりについて教えを進めて行きます。今日は２章の１－１３節を見て行きます。彼が言いたいことというのは、あなたは神が扱うように人を扱っていますか？ということです。

そのことを読者たちに、そして、今の私たちにもチャレンジを与えるのです。

☆隣人との関わりについて

１．人をえこひいきしてはならない　　１－１１節

１節を見てください。こういうことをしてはならない、こういう扱いをしてはならないと彼は教えます。１節**「私の兄弟たち。あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから、人をえこひいきしてはいけません。」**、人をえこひいきしない、偏見や偏愛をもって人に接してはならないと言うのです。私たちの問題は、その人の「人としての価値」を見て判断するのではなくて、どちらかというとその人の外側を見てその人の価値を判断をするところにあります。たとえば、その人の人種であったり、国籍であったり、その人がどれだけ裕福であるかとか、その人が社会的にどんな地位をもっているかとか、そのようなことでその人の評価を下し、この人と付き合えば何か得があるのではないか、というようなところでもし私たちが人を見たり、また、ここにいる人は非常に貧しい人だから、こんな人といっしょにいるところを見られたら恥ずかしいと言って差別するなら、あなたは大変な間違いを犯しているのだとヤコブは言っているのです。彼はここでこのような命令を、しかも現在形によって与えているというのは、これをしてはならないし、これからもしてはならないということを強調したかったからです。

ここでヤコブは読者がイエス・キリストを信じる者として語っています。**「私の兄弟たち」**と彼は言い、しかも、ここで**「栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っている」**と言い、そういう人が人を差別してはいけない、人を偏った見方で見てはいけない、外側だけで人を判断して差別するようなことがあってはならないと言うのです。このことについて私たちは彼から詳しい説明を聞く必要はありません。というのは、私たちはそれが正しくないということを教えられなくても分かっているからです。特に、私たちイエス・キリストを信じた者は、神の愛が私たちのうちに注がれているので、いろいろな変化が起こってきます。その一つは大変難しいことですが、神の助けによって人を同じように愛して行こうとします。このような変化を神は私たちのうちに為してくださるのです。ですから、そのような偏見、偏愛をもって人を扱ってはならないということは、私たちはよく分かります。けれどもヤコブは、実はこのようなことがこの当時の教会の中に大きな問題として存在したので、彼はそのようなことをしてはならないと三つの理由を挙げて教えて行きます。それによって彼らがもしそのような間違いを犯しているならそれに気付くように、そして、今そのようなことがないなら今後も決してそのようなことがないようにと、そのことをヤコブは読者たちに教えて行こうとするのです。

「えこひいきをする」ことが間違っているその理由

（１）クリスチャンが生かされている目的に反するから　　１－４節

「あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから、」とあります。つまりヤコブはここで、その行為は間違っている、あなたは栄光の主を信じたのだ、すなわち、栄光の主を信じたあなたには、この栄光ある主を証する責任があるのだということを言っているのです。ヤコブはここでただ「イエス・キリスト」と言わなかった、**「栄光の主イエス・キリスト」**という表現を使っています。このことばを見るとき、イエスがまことの神であることを彼の兄弟（ヤコブ）が証していることは驚くべき宣言です。同時に、ヤコブはなぜここで**「栄光の」**ということばを使ったのでしょう？私たちがいつも頭に入れておかなければいけないことは、この読者たちはユダヤ教の中から救い出されたクリスチャンだということです。ですから、彼らは旧約聖書を良く知っているのです。ヤコブは何を彼らに

教えたかったのかというと、「栄光」ということです。かつてのユダヤ人の歴史を見たときに、モーセが神から十戒をいただくときに、あのシナイ山は燃えていました、それでモーセは山に登って行きます、彼はそのシナイ山の上で神からの律法をいただくのですが、このようにみことばは教えています。出エジプト２４：１６－１７**「主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。:17 主の栄光は、イスラエル人の目には、山の頂で燃え上がる火のように見えた。」**このように、神の栄光が存在したところはこのような形で人々の目に届いたのです。また、幕屋を建てたとき、その幕屋が栄光に満ち溢れました。神殿を建てたときに、そして、契約の箱を運び入れたときも、その場所が栄光で満たされたことが記されています。**「祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が主の宮に満ちた。:11 祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。」**（Ｉ列王記８：１０－１１）。このような出来事は皆さん覚えておられるでしょう。読者たちはよく分かっていたのです。自分たちの先祖のことです。彼らは様々な形で主の栄光を見てきた、そして、その主の栄光はイエス・キリストを通して明らかにされたのです。

だから、ヨハネ１：１４に**「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」**とある通りです。みことばが教えてきていること、そして、ヤコブが読者たちに教えたいことは、あのシナイ山の上で、あの幕屋の中で、あの神殿の中で、人々が見てきた主の栄光を私たちはイエス・キリストのうちに見ているのだということです。そして、この栄光に満ち溢れたイエス・キリスト、この主をあなたたちは信じている、では、その栄光ある主をいただいているのはだれなのか、その栄光ある主が内在しているのはだれの内なのかと言うのです。イエスを信じた私たちの内には栄光ある主が内在している、だからクリスチャンなのです。そうすると、私たちがこの地上に生かされているこの時間、私たちが神から望まれていることは何かということは明確です。それは、この栄光の主を明らかにして行くことです。だから、パウロはＩコリント６：１９－２０でこのように言うのです。**「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから<u>自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。</u>」**と、私たちクリスチャンがこの地上に生かされている目的がこれなのです。栄光の主が私たちのうちにおられるのです。その栄光の主のすばらしさを私たちは明らかにして行くのです。だからヤコブが言うことは、もし私たちが人をえこひいきしているなら、偏って人を見たり、偏って人を愛したりしているなら、私たちは神の栄光を現わすことがないというのです。なぜなら、その行為は神のご性質に反するもの、神が私たちを生かしてくださっている目的に反するものだからです。そのようなことのために神は私たちを救い出したのではないのです。救われていない人がそうするのは当然としても、罪から救い出され神のものとされた私たちが生かされている目的は、神がそうであるように、すべての人を愛することです。そうすることによって私たちは、この世に生かされている目的を果たすことができるのです。

そこでヤコブはもう少し、この「えこひいき」ということについて実例をもって話して行きます。そのことがこの２－４節に記されています。**「:2 あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、立派な服装をした人がはいって来、またみすぼらしい服装をした貧しい人もはいって来たとします。」**、このようなことがこの当時あったのですが、**「あなたがたの会堂に」**とはユダヤ人の会堂を使って集まりをもっていたのでしょう。読者がどのような人たちかがこのことばからも明らかにされます。この当時、初代教会の頃は人々も教会も非常に貧しかったのです。そうような所にお金持ちの人が入って来たのです。金の指輪とありますが、この当時のお金持ちは中指以外の指に金の指輪をはめていました。この当時の様子を記した本には、ある人は１本の指に二つの金の指輪をはめていたとあります。ある人は金の指輪を持っていなかったので人から借りてきてでもはめていたとあります。何のためにそのようなことをしたのでしょう？自分はお金を持っていることを明らかにするためです。そのような目的をもって教会に来る人がいたということです。自分が裕福であるということを印象付けたかったのです。そういう中にあってヤコブが警告したことは、栄光の主を信じたあなたたちは、世の救われていない人たちと同じようにふるまってはならないのだということです。３－４節には**「3 あなたがたが、りっぱな服装をした人に目を留めて、「あなたは、こちらの良い席におすわりなさい。」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい。」と言うとすれば、:4 あなたがたは、自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったのではありませんか。」**とあります。このようなことは決してしてはならないと。

このように実例をもって、人をえこひいきすることが罪であること、間違っていることを明らかにしたヤコブは、再び５節からその行為が誤っていることを教えて続けて行きます。

（２）神のみわざに反することだから　　５－７節

ローマ２：１１に**「神にはえこひいきなどはないからです。」**とあります。えこひいきのない神を信じて

いるあなたが、どうして人をえこひいきするのか、それは神がなさっておられることと相反する行為であるとヤコブは言います。神はほんとうに人を愛してくださっているのです。５節を見ると**「よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。」**とあり、どんなに神が愛してくださっているのか、救われた人々に対してどんなにすばらしい祝福を与えてくださったのか、ここに記されています。三つのことが出てきます。一つ目は神はあなたを選んでいてくださった、**「この世の貧しい人たちを選んで」**とあります。二つ目に信仰に富む者としてくださった、**「信仰に富む者とし」**と、イエスを信じることによって、この救いに与ることによって、私たちはこの地上にあって神からすばらしい祝福をいただく者になったのです。それまでのいかなるものも与えることのできなかった祝福を私たちはキリストにあって得たのです。だから、私たちクリスチャンは世の人と違う生き方ができるし、そのことを当然神から期待されているのです。神は私たちを変えてくださったからです。お金があれば幸せだとか、ある地位を確立すれば幸せだとか、こういうものを手にすれば幸せだとか、それが幸せをもたらさないことは私たちはもうすでに分かっています。神以外のところに幸せを求めていたゆえにそれを見出すことがなかった、しかし、私たちイエス・キリストを信じる者は神の恵みによってそのすばらしい祝福をいただく者になったのです。三つ目に神がくださる祝福というのは、御国を相続する者とされた、**「御国を相続する者とされたではありませんか。」**と、これは将来のことですが、それが現実であることを明らかにしているのです。天国に行くのはまだ先のことです。しかし、もう天国に行くという約束が与えられているのです。私たちはそのときを待望しながら今を生きるのです。だからヤコブは、神はこのような愛をもって、私たちイエス・キリストを信じる者にすばらしい祝福を与えてくださったと私たちに教えるのです。パウロはローマ８：１７でこのように言います。**「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」**、私たちクリスチャンは相続人だと言うのです。すばらしい永遠という相続がもう決まっているのです。これは神の約束です。そして、何度も私たちが見てきたように、私たちがキリストにつながっている、キリストのものだということは、私たちがイエスを信じてから信仰における様々な苦難を経験するからです。ヤコブのことばによるなら「さまざまな試練」を私たちは経験するのです。そのことによって私たちが本当に神に救われていることが明らかになる、そして、救われている私たちは確信をもってこう言えるのです。「私は神のすばらしい祝福を相続する者となった」と。

このみことばを見て、私たちが注意をしなければいけないことは、神は貧しい人だけに目を留められたのではないということです。みことばを見ると確かに、金に頼っている人々、金の亡者たち、そういった金持ちはなかなかその富を手放すことができない、富を神以上のものとしたり、神としている人々が何度も出てきます。裕福な若者の話があります。どうすれば永遠のいのちを得ることができますかとイエスに問い掛けます。イエスが答えられたことに「私はそのようなことは守っています」と言います。そのときイエスがあなたの財産をみな売り払ってわたしについてきなさいと言ったとき、彼は悲しみながら去って行くのです。彼にとっては永遠のいのち、神と和解して救いをいただくことよりも、自分の富に頼って生きたかった、その方が重要だったのです。そこでイエスが言われたことは、金持ちが救いにあずかることは非常にむつかしいということでした。でも、同じように貧しい人も同じことが言えます。しかし、この当時の集まりを見たとき、貧しい人たちが教会にはたくさんいたのです。ですから、貧しいからこれだけの所得だから神は救ってくださって、それ以上だから救ってくださらないという、そんな愚かな議論をしているのではありません。神はすべての人を愛しておられます。すべての人間はその神の導きに対して「応じる」という大きな責任があります。しかし、この世から価値がないと見られていたような人々に対して、神はあなたがたを愛しているといわれたのです。みことばには、唯一の神が存在しその神は分け隔てなくすべての人を愛してくださっていることが明らかです。**「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとっても、神です。:30 神が唯一ならばそうです。」**とローマ３：１９－２０でパウロは教えます。コロサイ３：１１を見てください。神の愛はえこひいきのないもの、偏見のないもの、偏ったものでないことがここに示されています。**「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、」**と、つまり、神の前には人種や国籍など関係ないというのです。また、**「奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」**と当時の社会にはそのような人々がいたのです。社会的地位も関係ない、神は奴隷も自由人も同じように愛してくださっている、そういった区別はまったくない、神は平等に愛しておられると言います。もちろん、神の愛には教育の有無や学歴も関係ありません。パウロはＩコリント１：２０－２１でこのように言います。**「:20 知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。:21 事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、**

神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」、この世では人々は自分の知恵を、学歴を誇るかもしれないが、神はそれは愚かなことだといわれます。なぜなら、人間がどれだけ学歴を積んだとしても言うことはみな同じです「神はいない」と。**「愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。」**（詩篇１４：１）とある通りです。だから、私たちの周りにはあたかもそれが真実であるかのように教えられている偽りがあります。地球はこのようにしてできたのだとか、人間はこのようにしてできたのだとか、そのようなことがまことらしく教えられています。しかし、聖書を見ると私たちが言えることは「それは間違っている」ということです。だからソロモンが**「主を恐れることは知識の初めである。」**（箴言１：７）、**「主を恐れることは知恵の初め、」**（箴言９：１０）と言います。そこからが始まりだと言うのです。人間の知恵は神の知恵には比較にもならないと。私たちの傲慢が罪に至らせるのです。私たちは被造物に過ぎないことに気付くべきです。人間の知恵がどれほどのものであっても神はその人間をご覧になって愚か者といわれるのです。感謝なことは、自分が神の前にどれほど愚かな者であるかということに神の恵みによって悟らされた私たちが、神の恵みによって救われたのです。だから、私たちは声を大にして言うのです。「私の誇りとすることは、私の財産でもないし、社会的地位でもないし、教育でもない、こんな愚かな者を救ってくださった神の恵みです。」と。あれだけ博学なパウロが私にとって誇りとすることは一つしかないと言うのです。神はどんな人でも同じように愛してくださっている、神の前に貧富の差など関係ありません。あの一人の金持ちのザアカイに対して神はあわれみを示された、同時に、２レプタ銅貨を入れている貧しいやもめにも目を留めて愛を示されました。神はこのように世の中の基準とはまったく関係なく平等に私たちを愛してくださっているのです。ですから、もし私たちが偏見・偏愛を持って人を扱うなら、私たちは神のみわざに反する行為を行なっているとヤコブは教えるのです。

そして、ヤコブは６節から、金持ちで神を信じていない人々のことについてこのように教えています。**「:6 それなのに、あなたがたは貧しい人を軽蔑したのです。あなたがたをしいたげるのは富んだ人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。:7 あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名をけがすのも彼らではありませんか。」**と、このようなことがこの当時人々は経験していたのです。裕福な人々の中に貧しい人々にまったくあわれみを示さないことがあったのです。**「しいたげて…裁判所に引いて行く」**と、この当時、高金利によって金を貸す者たちがいたのです。そして、その返済が滞ってしまうと、金を貸した者は負債を負っている者にたとえば町で出会ったら、その人を締め上げて、法廷へと引っ張っていったのです。このようにまったくあわれみのない行為をもってその人たちを扱っていたのです。そこで、ヤコブは言います。もう一度思い出して見なさい、あなたたちが尊重して尊敬を払おうとしている人たち、彼らはこのようなことをし、そして、７節に**「あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名を」**とあり、**「尊い御名を」**とはイエス・キリストの御名、**「あなたがた」**はクリスチャンのことですが、彼らはクリスチャンが信じるイエス・キリストを汚す、そのような人々ではないのですか？と。もちろん、私たちは彼らに愛をもって福音を伝えて行く責任は当然あります。しかし問題だったのは、集まりの中でその人々に特別な場所を設けたのです。そして、教会はそのような差別のないところであるはずなのに、世の中と変わらない差別を設けていることをヤコブは指摘しているのです。

（３）律法に反することだから　　８－１１節

８節から**「もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行ないはりっぱです。:9 しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。:10 律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。:11 なぜなら、「姦淫してはならない。」と言われた方は、「殺してはならない。」とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。」**。ヤコブがここで言っていることを見ましょう。最初に言ったように読者たちはユダヤ教に通じた人々です、旧約聖書の教えをよく知っている人々です、それで旧約聖書からこのみことばを引用するのです。もちろん、イエスは新約聖書の中で最も大切な戒めは何かという質問に対して、神を愛することであり、隣人を愛することであると教えられました。ヤコブはそのみことばを挙げて、あなたは９９％律法の教えを忠実に守っているかもしれない、しかし、もし一つでも教えを破っているならあなたは全体を破ったことになるのだと言います。９９％守っているからこれ位は構わないのではないかと、もし私たちも同じようにそう思っているなら大きな間違いをしているのです。私たちはそのように思い込みたくても、みことばは**「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」**と教えます。なぜなら、一つでも罪を犯しているならその人は汚れているのです、神に逆らったのです、神が言われるのは完全かどうかです。そしてヤコブは、あなたがたはそれでも構わないと思っているかもしれないが、決してそうではないと言います。あなたが隣人に対してどのよう

な扱いをしているか、どのように愛を示しているのか、よく考えて見なさいと言うのです。そのことを考えることによって私たちは自分がいかに不完全であるかが分かるのです。**「姦淫してはならない。」と言われた方は、「殺してはならない。」とも言われた**とあります。すべての点において完璧なのか、そうでないのかです。もちろん、みことばは私たちに「義人はいない、一人もいない」と言われるわけですから、完全な人間などいません。しかし私たちの問題は、いつまで経っても「神と私の関係」で自分を見ないことです。私たちがしていることは「人との関係」で自分を見るのです。そうすれば安心するからです。あの人より私はましだとか、あの人より私はこのようにしているからと、しかし、私たちクリスチャンがしっかり覚えなければいけないことは、神が私をどのようにごらんになっているかです。そして、私たちは全能のきよい神を見たときに、神の要求しておられる律法という神の基準を見たときに、いかに私たちがその基準からはずれているか、いかに罪深い者であるかということに気付く、そのことが必要なのです。そのことをヤコブは再び彼らに教えるのです。人をえこひいきしているならあなたは神の律法に背いている、それに反することを行なっているのだと教え、それゆえに、そのようなことをしてはならないのだと言うのです。

この三つの理由を挙げたあと、彼は１２－１３節で最後の勧めをします。

２．ヤコブの勧め　１２－１３節

１２節には**「自由の律法によってさばかれる者らしく語り、またそのように行ないなさい。」**とあります。これはイエスを信じる人々に対する勧めがなされているのです。あなたが栄光の主イエス・キリストを信じているなら、このような歩みをしなさいとヤコブは勧めたのです。二つのことがあります。「語る」ことと「行なう」ことです。私たちのことばと私たちの行ないです。**「自由の律法によってさばかれる者」**とは、すでに１：２５で**「完全な律法、すなわち自由の律法を」**と見ましたが、これは神のおことばのことです。神のおことばによって私たちは自由を得たのです。神のおことばを信じることによって私たちは罪から自由にされたのです。そして、私たちは救われた者として、永遠のさばきに会うことはありませんが、神の前に立つときにさばかれるのは、私たちが神のおことばに対してどのように生きたかです。神はみことばによって私たちにみこころが示され、それに従って行くようにと教えてくださった、私たちがそれに従ったかどうかがさばかれるのです。だからヤコブはここで**「自由の律法によってさばかれる」**と言い、自由の律法によって自分の歩みが審判されると言うのです。私たちが忠実にみことばに従って歩むなら、神はすばらしい祝福を約束してくださったのです。もしそうでないなら、地獄に行くことはないし、永遠のさばきに会うことはないけれど、神の祝福を逃してしまうのです。だから、救われている者らしくあなたは語り、救われている者らしく行動をして行きなさいと、これがヤコブがここで読者たちに教えたことです。

ヤコブは、１節でクリスチャンである皆さん、このようなことをしてはならない、人をえこひいきしてはいけませんと、現在形で教えましたが、その後もずっと現在形で続けてきました。１２節の命令も現在形で記されています。クリスチャンとしてふさわしいことを語り続けて行きなさい、ふさわしい行ないを行ない続けて行きなさいと、ヤコブは命じているのです。してはならないこと、私たちがしなければならないことを彼はここで教えるのです。継続して習慣的にこのような歩みを為して行きなさいと。１３節を見ると、この勧めと関連して最後に警告を与えています。**「あわれみを示したことのない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。」**、神の罪のさばきに対して、それから私たちが勝利することができるのは、それから逃れることができるのは神のあわれみによるということを教えるのです。そして、そのあわれみによって私たちは神のさばきから救い出されたのです。同時に、このみことばは**「あわれみを示したことのない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。」**と警告を与えています。この当時もあわれみを示すことのない人たちがいたのです。偏見をもっている人、人をさばいている人々がいたのです。しかも**「あわれみを示したことのない」**とあるこの「示す」というのは、その人の何回か行なった行為ではなくその人そのものの生き方を要約しているのです。そのことをしっかり覚えておかなければなりません。残念ながら、私たちも神の愛によってすべての人を同じようにいつも愛し続けて行くことは難しいことです、あわれみを示すこと、親切にしたり、助けをしたりと隣人をほんとうに自分を愛するように愛することは難しいことだから、私たちはその点でいろいろ失敗するのです。この**「あわれみを示したことのない者」**というは、その人の生き方を要約するなら、あわれみがまったく示されていない、そういう人のことです。その人たちの運命は神からまったくあわれみをいただくことなく、その罪のさばきを受けると言うのです。この人たちは神のあわれみを受けたことのない人、すなわち救われていない人たちです。その人たちに対しては神は容赦なくその罪を公平にさばくということを警告しているのです。

今日私たちはヤコブの手紙から、私たちが隣人に対してどのような扱いをするかということ、それが私たちの信仰が本物であるかどうかを明らかにするのだということを見てきました。ですから、私たち

が人々にあわれみを示すということは、私たちの信仰が本物だからです。言い方を変えると、神の助けによって自分を愛するように隣人を愛して行こうというのは、あなたが救われているからです。しかし、もし私たちが人々に対してあわれみの心をまったく持っていないなら、あなたの信仰はもう一度吟味してみなければいけないと、ヤコブは私たちにチャレンジするのです。

この隣人を愛することに関して、イギリスの作家でまた神学者であったＣ・Ｓルイスはこのようなことを言っています。「われわれすべての者に与えられている規則はまことに簡単なものである。自分は隣人を愛しているだろうかなどとくよくよ考えている暇があったら、愛しているかのように行動してみるがいい。行動するやいなやわれわれは大いなる秘訣の一つを発見するに至る。それは愛しているかのように振舞っていると、やがてその人をほんとうに愛するようになるということである。しかし、これには一つだけ例外がある。親切にするのはいいが、それが神を喜ばせ愛の法則に従うためではなく、自分がいかに人を赦す立派な人物であるかを相手に見せつけ、彼に借りを作らせるためだとしたら、そして、彼が感謝を述べに来るのを座って待っているとしたら、恐らく失望に終わるほかあるまい。」と。私たちは見せびらかすために隣人に愛を示そうとするのではないのです。神が愛してくださったから、神が扱うように人々を扱おうとするのです。私たちは何も周りの人々に比べて優れているのではありません。大切なことは、私たちが周りの人々にどのような思いをもって、このキリストの愛を示しているのかということです。特に、この日本の教会にあって私たちが改めなければならないこと、日本人がもっている偏見が、残念ながら教会の中にも持ち込まれてそれで構わないとして教会を形成しているなら、私たちは神の前に悔い改めなければなりません。みな神が愛する人々です。今、私たちが自分自身の信仰を吟味して、もう一度主の前に問い正さなければいけないことは、私は人に対して差別をしていないかどうかです。キリストの愛が私を通して自由に外に現わされているかどうかです。神はすべての人を大切な者としてお造りになった、そのようにみことばは私たちに教えるのですから、それを学んでいる者として、神が人を愛するように私たちも隣人を愛するのです。それが、神が私たちに望んでおられることであり、そして、それをしようとする人々はこの栄光の主イエス・キリストを信じ受け入れた人々です。私たちが望むことはこの群れがもっと神の喜ばれる群れに変わることです。そのために、栄光の主を受けた私たち一人ひとりが変わって行くことです。私は何のために生かされているのか、主の栄光を現わすために生かされているというとその目的をしっかり覚えて歩んで行くことです。主よどうぞ私の罪を赦し続けてください、私の誤っているところ、私の弱いところをあなたの前に告白します、助けをください、そして、あなたが喜んでくださる者として歩むことによって、あなたの栄光を現わすことができるように、このように歩むならあなたは変わってくるし、あなたは用いられるし、そして、何よりもあなたを通してキリストのすばらしさ、その栄光が明らかにされて行く、そのために私たちは生きているのです。主の前に正しく主の助けによって歩んで行きましょう。